

海景幻想

一九八八年一月二〇日印刷
一九八八年一月二五日発行

著者 中村真一郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 業務部 03-2661-5111

編集部 03-2661-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一五〇〇円



© 1988 Shin'ichiro Nakamura
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-315510-8 C0093

中村真一郎作品集目次

海景幻想	7
恋さまざま	33
波の壁	95
三都の春	123
妣の国を求めて	151
ふたつの友情	177
ピアノの部屋	205
遠くなる歳月	237

装画
いわた
きよし

中村真一郎

海景幻想

海景幻想

或いは春色の領域

芥川龍之介は或る年の新年号の二つの雑誌に、同時に夫それぞれ短篇小説を発表した。ひとつは中国清朝初期の二人のすぐれた画家、憚うらやま南田と王石谷にまつわる物語で「秋山図」という表題であり、もうひとつは、ロシア十九世紀八十年代の或る日の、ヤスヤナ・ポリヤナ邸へトルストイを訪ねたトゥルゲニエフの、やはり二人の旧友同士の物語で、これは「山嶋やまじき」と題されている。

つまり、いずれも二人の心の通い合った友人の物語、それも一世を風靡した大芸術家の間のでたい交歓の図を、博学の芥川らしく奇工を凝らして、お互いに時代と場所とを大きくへだてて作りあげたわけであるが、更に凝っているのは双方の終り方で、前者は「憚王の両大家は、掌を拊うつて一笑した」となっており、後者は、「二人の翁は顔を見合せると、云ひ合せたやうに哄笑した」となっている。つまりこの大正時代の流行作家は、新年号の雑誌の正月気分に合わせて、縁起のいい福笑ふくわらいを提供しているのである。

どうして今、唐突に彼がこのふたつの古い小説を同時に思い出したかと云うと、実は最近上京

した折りに、上野の博物館でこの清朝の惲王の二家が扇面の表裏に墨菊図と溪山図とを、仲良く夫ぞれに描いたものを偶然に目にしたばかりか、この小説で問題となっている元朝の大家黄大癡の画卷を王翬自身が模写したものにまで出会う幸運に浴したのと、又、同じ時に呉服橋の劇場であの『父と子』や『貴族の巢』の作者の若い頃の戯曲を見物して感銘を受けたことから、久し振りにこの作家の上に思いを馳せたことに関係がある。

——これは今、海辺の部屋に戻つて来たばかりの彼がまだ生れるか生れないかの遠い昔の、世の中の呑気な時代の文壇の空気を伝えてくれる挿話である。

この物語の主人公も、また現代の作家と呼ばれる職業の男であるが、気早な東京人である彼は、例年、早い秋の気配のなかで、来年の新年号の雑誌のための準備をはじめることになっている。

今年もそろそろ気分をそちらの方に切り換えようかと、颯風の過ぎ去つたあとの、異様なくらいに平静な湾内の水面を見下しながら、ほんやりとノートを上げたまま考えこんでいると、ふとこの芥川の佳話を念頭に甦らせたのである。そして、突然に、少年時代の彼に文学的開眼をさせてくれたこの大先輩に対して、半ば戯れに挑戦してみたくなった。

芥川にとつて、その年の正月の主題は、二人の友の会心の笑い合ひであった。おれにとつては、それでは何だ、と、そう思った途端に彼の脳裡にひらめいたのは「春色」という言葉だった。なぜそれが春色であり、春風や春愁や春意や春曙でないのか。一体、この春色という言葉は、彼の意識の森の奥の仄暗い一角のどの辺から、どのような秘密の迷路を辿つて、明るい意識の表面にまで立ち現れて来たのか。それは一瞬まえまで予想もつかない観念なり雰囲気なりだったから、

彼は大急ぎで最近経験した事件、会った人、読んだ本の記憶などの上に、追求の探照燈の光りの矢をひとまわり巡らしてみたものの、やはりその言葉の出で来た痕跡の穴は、どこにも開いていないのである。

そこで偶然に期待できないとなれば、積極的に探究の歩を進めるしかない。彼は夏の山暮しの透明な時間以来持ちこしていた幾分の夢見心地の霧を、脳のなかから振り落すように首の運動を試みながら立ち上ると、目のまえの大きな辞典の列の先ず第一冊の索引の巻から、「春」の部の載っている巻数を見出し、それからその巻の表紙が、木の棚に夏の暑いあいだ日ざらしにしていたために貼りついていてのを、剥がして書物机のうえに移した。

何と「春」の部だけで細字四段組みの二十五頁もある。禹域ういきでは古代以来、この春という觀念を巡って、驚くべき多彩な思想や映像を拈ひげつづけて来たわけである。

彼はまず「春」の語意を読む。第一は勿論、季節のはるである。「年の始め。〔公羊〕春者何、歳之始也」とある。それに附随して、春情、なさげ、という意味がでてくる。「男女の情感。〔詩、召南〕有レ女懷レ春」。ここまでは彼も従来、知っていたが、第二に唐代では酒の意とあつたのは意外だった。「唐代の通語。〔正字通〕春、唐人名酒為レ春」。もつと奇抜なのは第三であつて、卵を意味すると云う。「広東の方言。〔広東新語〕粵方言、凡禽魚卵皆曰レ春」。最後に、また人の姓にもある、と云う。

これだけのことにひと通り目を通したあとで、いよいよ彼は「春色」の項に注意を集めることにした。

『春色』シヨクン ○春の景色。

これには例として南北朝の沈約の詩が引かれている。

山光浮レ水至 春色犯レ寒來

ここでは春色は冬の終りの寒さを押しつけてやってくることになっている。

ところが、この項目に附随した、

『春色滿レ皇州』シユンシヨク クワウシウニミツ みやこ中、春の景色になる。の方は、例に引いた六朝の謝朓しやうたうの

詩のなかに、

桃李成二蹊径一 柔榆蔭二道周一

などの行があるから、春も盛りと見える。

春色の概念は、季節いっぱいを覆うものであるらしい。

ところで、ちよつと気になるのは、もうひとつの附随の項目の方で、

『春色惱レ人眠不レ得』シユンシヨク ヒトヲナヤマシ ネムリエズ 春景色のために、夜ねむられない。

とあるが、これは一体、どういう意味だろう。この辞典の編纂者である一世の大学者は、本当に春の景色のために眠れないという経験を、御自身で味わったことがあるのか。今、辞典のこの頁の細字のうえに、老眼を吸い寄せられるようにして、語意を読みとろうとしている彼は、長年の作家暮しの修練によって秘かに感覚の洗練を誇っているものであるが、それでも春に限らず眼前の自然の風景そのものによって不眠症となったという事例は思い浮ばないのである。

この項目の句の典拠である宋の王安石の詩がそこに引かれているが、

金鑪香爐漏声残

とか

月移「花影」上「欄干」

とかの艶麗な句があつて、それは単なる景色というより、どうやらその景色を背景として、そこに甚だ濃厚なる場面が演じられて、その気配が充分なのである。辞典の項目の筆者は素知らぬ振り、で野暮天を気取つてゐるのか、それとも醇平として醇なる浅黄裏なのか。

要するに、春色はここではひとつの暗示となつてゐる。あるいは英詩の方で云う「二重映像」となつてゐる。

そこで、もう一度「春色」の解釈の本文の方へ戻ることになるのであるが、

○酒気。「紅樓夢、三十九回」姑娘今日臉上有些春色。

美人が酒に酔つて、ほんのりと臉のうえを染めてゐる。それを「春色」と形容してゐるのが、あの有名な好色小説のなかだとなると、これは仲々眠れなくなることも、大いにあり得るだろう。

そこで彼は勢いの赴くところ、もう何十年も書庫の隅に埃をかぶらせていた古い「紅樓夢」を引つ張り出して来て、その第三十九回を開けて見た。幸田露伴の古風な訳文が、原文の面影を彷彿とさせる面白い文体なので、問題の箇所をそのまま写してみると、ここは平兒という女中が、他所へ使いにやつて来て、その台所で御馳走にあずかる場面であるが、

「周瑞、張材の両の家的は笑ひながら道お様、姑娘、今日は臉上が些春色ですね、眼睛の圈兒が都紅了となつて居ますね。平兒、可是不、我は原と吃ませんですのに、大奶奶と姑娘們が只是

に拉著おひきとめになり、死灌むりにかのませになりましたので、已むを得ず両杯嗑二三ぱいいたま了たましたら、臉かほがこんなに紅あかくなり
ました。云々。」

今世紀の初頭に世に出たこの翻訳は、実際に巻末に附せられた原文と対比してみるに、殆んど逐語訳であることが判る。それにしても清朝の口語文は、おれたちが中学時代以来、教室で習ってきた漢文、つまり中国古典の文語文とはまるっきり別のもので、その知識で読もうとしても歯の立つものではない、と彼は久し振りにそうした感慨を新たににして、もう一度その珍妙な和漢混濁体に戻りながら歎息した。

が、さて、そこでもう一度、腿の割れた婉な中国服の少女の、臉のうえの夕映えの景色の幻想から醒めて部厚い辞典を閉じ、その上に肘をついてみると、彼の脳裡に先ほど啓示のようにひらめいた「春色」という言葉と、彼の胸の奥に薄暗く拡がろうとしている幻想的空間とは、相変らず一向に溶け合う気配がない。ここは一番、ポードレルの得意な、「万物交響コレスホウケンシュウ」の象徴的操作の発動を是非願いたいところなのだが、その神秘的現象は御承知のように、理詰めで追い出すような性質のものではないのだから、何かの衝撃の到来を待つか、それともこれは全く手蔓はないのだから、文学的形容として言ってみるに過ぎないのだが、「阿片のたすけをでも藉りなければ」どうにもならぬ。その瞬間が訪れるか否か、はひとつの賭ということにして、今度は今までのように彼の外部の知識ではなく、「春色」を巡って、内部に記憶の通路の曲り角のあちらこちらに眠っている、断片的知識を目覚めさせて行こうと思いついた。

順序として、やはり今の辞典の時点から出発する。「春色」はまず漢土の文化の生んだ概念で